書評

津田秀夫著『幕末社会の研究』

水本邦彦

一

三大改革論、合翠堂研究等と並び、著者津田秀夫氏には周知の如く、畿内をフィールドとした近世農村社会に関わる研究がある。本書は、これらの中から幕末・維新期の農村社会構造を扱った論文四篇を取上げ、かつ未発表論文「歴史学とその方法（試論）」を冒頭に掲げて編まれたものである（なお、既発表論文四篇は、本書集録に際して若干補筆されている）。

まず、本書の構成を示してみよう。

序論　歴史学とその方法（試論）
幕末・維新期の農村構造
幕末・維新期の近郊農村の性格
封建社会解体過程と地主制の展開
幕末期の雇傭労働について
あとがき

幕末・維新期の農村構造を扱った第二～第五論文が、いずれも当該時期研究上の必読論文であることは、ここで改めて言うまでもないことであろう。と同時に、第一論文やあとがきには、著者自身の歴史研究、幕末・維新研究への関わり方が明示されており、この点から見れば、本書は単なる学術専門書に留まらず、やや高度ではあるが、近世史研究の入門書としての性格をも合わせ持つものである。

正直な所、私は著者の講義を教室後方に坐して受動的に傾聴する生徒の如きであって、いずれの点においても評者たる資格を持ち合わせぬ者であるが、以下、能力の範囲内で内容の要約を行ない、あわせて若干の感想を記して書評に代えさせて戴くことにする。

二

さて、本書に集録された諸論文は、あとがきにも明記されているように、共通した問題関心で貫かれている。すなわち、いずれの論文も、「日本近代の出発点を把握するのに、それをささえるような条件なしで、はたして日本近代の展開が可能であったかという疑問」（三二一頁）から出発し、「日本の近世国家支配をささえた社会原理とは異なるむしろ近代的要素が、いかに対外的契機を受ける前に成立し、受ける段階にいたっても初期にはみずからの近代を作り出すのに作用していたかを知るため」（同右）に記されているのである。以下、かかる問題関心によって論じられている各論文について、若干のコメントを付しつつ辿ってみよう。

「序論　歴史学とその方法（試論）」は、言うなれば、幕末・維新期研究の意義と課題を射程に置きながら展開された、史学概論であって、現代社会における歴史学研究の意義、日本・アジア・世界の関係、世界史の基本法則と日本史との関連、幕末社会研

究の意義、等々、その論点は多岐に亘っている。この中で、著者の主張を端的に表現するのは、「自国史の立場からの日本史研究」という提起であろう。それは日本中心主義の国史学とも、またその批判として提出された、世界史の基本法則を前提とする一国史としての日本史とも異なり、「民族的責任を負うべき歴史変革の主体にたいして、科学としての歴史学の立場からの問題提起を含むものでなければならない」（二六頁）ものであって、「世界資本主義の運動法則のなかで、とりわけ、アジア諸民族の人民闘争が資本主義に対抗しつつ、解放や変革を推進する主体となっているのを、国内史の課題として展開していくこと」（同右）を内容とするものである。この提起は、著者が幕末・維新研究を、「自国史の立場から日本の役割を検討する恰好の時期である」（三五頁）と位置付けられていることとも関わって、興味深いものであるが、この点については後に再度触れるつもりである故、ここでは、一九七七年成稿の奥付けが示す様に、本論文は本書集録論文中最も新しいものであり、むしろ、著者の今後の研究に際しての視角提示、という意味あいを持っていると思われることのみを指摘しておきたい。

第二論文「幕末・維新期の農村構造」（一九七二年）は、一九六九年発刊の佐々木潤之介氏著『幕末社会論』に対する、著者の批判を論証したものである。すなわち、同書で提示された周知の如き半プロ論に対して、著者は、「幕末・維新期において農村に滞留せしめられた零細な無高層を、単純に農業労働のためにのみ滞留せしめられているものであるといい切ってしまってよいだろうか」（四一頁）と問い、農業経営に還流されない賃稼層＝原生プロの存在を摘出される。論証の主たる素材は、明治四年河内国丹南郡岡村の戸籍簿である、氏はまず、一八五軒の居住者中一方の極に一二名の地主階級が、また他方の極に二一軒の二石以下層、九八軒の無高層が存在することを確認された上で、次の如く整理される。①ここに見える地主階級には問屋的性格、商人的要素を含まぬ者が多く、所謂三位一体の豪農範疇では捉えきれぬ、②二石以下層になると、農業賃稼、糸稼、毛綿糸稼等賃労働者の原生的形態と捉えうる者が存在する、③無高層は、小作人、農工商兼業、農業賃稼、毛綿賃稼、毛綿賃稼兼小作人、職人、その他に分類できる。かかる整理の上で結論として、著者は、無高層のうちの農業賃稼層、毛綿賃稼層に着目、これを、後にマニュ経営に吸収され中小企業の通勤労働者となる者の原基形態と捉え、原生プロと呼ぶとされている。

この様に論じられた本論文は、戸籍簿の詳細な分析に基づいているという点で、説得力を持つものであるが、疑問点として、原生プロに対立する資本のあり方如何という点を挙げておきたい。著者自身後に指摘される如く、「いかに雇傭主がたんに他人労働を雇傭しているという事実を指摘しようとも、その経営をブルジョア的性格をもつものとは」（二五三頁）即言えぬのであり、従って農業賃稼層等を原生プロと規定するからには、彼等を雇傭する資本の分析が不可欠である筈だが、この点はあまり明確ではなかった様に思う。本論文がとりわけ佐々木説批判を眼目としている以上、一層この問題の検討が望まれる所である。

第三論文「幕末・維新期の近郊農村の性格」（一九七六年）は、第二論文と並んで佐々木氏批判を意図したものであると共に、大

坂における打こわしについての氏の評価を示すという意味を持つものであって、摂津国西成郡中在家村を例として、幕末期都市近郊農村における社会関係、都市と近郊農村との連繋条件等の問題が論じられている。具体的な分析結果は以下の如くである。①すでに宝暦期には、所有と経営の分裂など石高所持による階層把握が困難な状況が生まれ、石高制の形骸化が見られる、②近世後期、本村では換金作物栽培が主体となり、これを背景に局地市場圏が繰り返し成立、なお稲作生産は自給食料獲得の位置を占めるに過ぎない、③明治四年戸籍簿によれば、農民的商品生産・流通に関わり再生産を営む、多数の非農業者の存在が注目される、等々。

本論文は、膨大な史料を駆使した、集録論文中最長編作であり、都市近郊農村の幕末・維新期における具体相を眼の当たりに彷彿とさせる力作であるが、第二論文との関係で素朴な疑問を挙げるならば、それは、同じく明治四年戸籍簿が素材として利用されながら、ここでは何故原生プロが摘出されないのかという点である。本論文中に佐々木説批判の論証を、評者なりに見出すとすれば、その一つは、ここで摘出された非農業者が、半プロではなくむしろ前期プロとしての性格を持つところにあると思うのであるが、それにしても、何故中在家村では原生プロが摘出されぬのであろうか。本論文が第二論文の後を受けて発表されていることとも関係して、この点触れられて然るべきだったと考えるのだが。

収録論文中最も早い発表年次を持つ、第四論文「封建社会解体過程と地主制の展開」（一九五八年）は、良く知られている様に、著者の地主制についての理解を総括的に提示されたものである。すでに本論文は、この分野の研究史において古典的位置を占めるものであり、今更紹介する必要もない所ではあるが、評者の学習という意味で、若干のまとめを行なっておきたい。まず、第一節では、地主的土地所有を規定して、「一面では、封建的本質をもちながら、他面では、領主的土地所有に対抗するような性格を持つ」（一六八頁）ものであり、領主的土地所有と事実上の農民的土地所有との対抗関係を前提に成立して来るものとした上で、ブルジョア的契機挫折論を批判しつつ、地主制再生産構造の一環にブルジョア的商品生産を認めることを主張される。ついで第二節では、幕藩体制下における地主小作関係の諸段階を、第一次名田小作、質地小作、第二次名田小作の三形態に分類、前二者はいずれも近代地主制の起点たりえず、事実上の農民的土地所有を前提に成立する第二次名田小作段階こそが、それに該当すると論じられる。かかる整理を前提した上で、以下第三節・第四節では第二次名田小作に焦点を絞り、その形成のための条件としての共同体の解体、賃労働の性格、商品生産・流通等の状況を述べられ、第五節においては地主制展開の諸要因（共同体の不十分な解体段階、貨幣・信用制度の未発達、ブルジョア的発展への幕藩制的規定性等）を挙げておられる。

畿内をフィールドとして、かつブルジョア的発展を強調する論者に限ってさえも、著者とは理解を異にする何人かがいることについては承知しているつもりであるが、この分野に自らの仕事を持たず、また学生時代、膨大な研究史に恐れをなして後期研究から逃げ出した経緯を持つ評者にとって、著者の見解を云々しうる力もなく、その任でもない。ただ、幕藩制社会の構造に関心をもつ者として、本論文から教えられた点を記すならば、それは、著

者が第二次名田小作と対比させて質地小作段階を置き、これについて、「小作人の側に、小作人とはいえ、なお本百姓としての権利が依然として保留されているのを、みのがすことはできない」（一七六頁）と指摘されていること、つまり、質地小作の成立を必ずしも即本百姓体制の解体開始とはしない、と捉えておられることである。著者のこうした理解は、漠然と質地の展開＝本百姓体制の解体などと考えていた評者にとって、極めて示唆的なものであり、本論文の古典たる所以は、こうした点にも現われている、と秘かに思う次第である。

第五論文「幕末期の雇傭労働について」（一九六〇年）は、幕末期に近代的労働の端緒的形態を見出せるか、見出せるとすれば、それは先進資本主義の影響に基づくものなのか否か、との自問から出発し、研究史の批判的検討、具体的史料分析を通じて、開港前、農業・農村工業のいずれにおいても、賃労働の端緒的存在が認められることを論証されたものである。具体的事例の一つは、和泉国宇多大津村を中心とする機業地帯における動向である。ここでは、天保～嘉永期の作付反別帳等を素材に、以下の諸特徴が指摘される。①他人労働力雇傭層として、富農・地主・中農上層と織屋層が存在する、②農業雇傭労働者には村内出身年季奉公人を中心に、日分け奉公人の出現が見られる、③織屋の場合は女子日雇労働者が圧倒的である、④労働力放出階層は、階層自体が著しく賃労働者化している、⑤家族労働力のみによる経営階層としては、中農、小織屋、小稼人、小商人が存在するが、幕藩制下の基本階層＝小農は全体の一〇％以下に落込んでいる。また、具体的事例の他の一つ天保期の和泉大鳥村においては、農業面での賃労働の端緒的形態が摘出される。ここでの分析結果は以下の通りである。①本村では一年季奉公人が過半を占めるものの、男子労働に限れば一年季奉公人と日分け奉公人はほぼ同数である、②ここに言う日分け奉公人の基本的性格は、成年男子の熟練労働であって、戸主の場合が多く、高賃銀を取っている、③日分け奉公人は農業経営における雇傭労働者としてのみ現われる、④一年季奉公人の中にも、小経営に回帰する年季奉公人（第一種年雇労働）の外に、日分け奉公人的性格のもの（第二種）が存在する、⑤第二種年雇労働こそが、農業における賃労働に結びつく性格のものであって、この成立のためには第二次名田小作段階を条件としている。

以上が、第五論文の要約であるが、本論文で十分理解できなかった点は、日分け奉公人と第二種年雇労働との類似についてである。著者の分析に従えば、確かに両者はいずれも戸主労働を含めた成年熟練労働者という点で類似してはいる。しかしながら、「大部分が借地による自己経営を持っている」（三一〇頁）という日分け奉公人の特徴は、第二種年雇労働との間に決定的差異のあることを示しているのではあるまいか。つまり、第二種年雇労働に対しては、日分け奉公人に対する規定、「地主制形成期での地主小作関係にささえられた初期的賃労働の一つの形態」（同右）は、該当しないのではないかということである。

以上、一知半解の誘は免れがたいが、著者の分析を章を追って辿ってみた。次に、通読して感じた印象を一・二記して、書評の責めを果たすことにしたい。

三

本書を一読して、まず最初に持った印象は、個々のテーマ、批判対象の差こそあれ、二〇年に亙って持続された問題関心の一貫性（日本近代への内発的要因の解明）と、それに基づいた執拗なまでの追究姿勢に対する敬意である。しかも、この問題関心が、すぐれて〝現代〟に対する著者自身の関わり方と直結している点にこそ、重要な意味があると思われる。すなわち、著者の追究された研究テーマは、例えば、「現代の危機をのりこえるためには（中略）成り行きにまかせるという受身の消極的な姿勢よりは、人間の能動性のある態度が必要となってきている」（九頁）とか、個体認識の確立・個人の尊厳性を基礎とする社会を再構成するにあたっては、他律的な原理よりは自発的な態度が重要であるといった指摘（三二一頁）等々、随所に記される現代の要請と固く結び付いているのであって、ともすれば研究史の粗探しに終始しがちな評者にとって、著者のかかる態度は学んで余りあるものと言わざるを得ない。豊かな人間性に裏付けられた教育・研究態度というのが、最近評者が耳にした、多くの学生諸君の期待する教師像であるが、右の如き著者のあり方が、こうした期待を満足させるに十分であることもまた、疑いない所であろう。冒頭に、本書をして近世史研究の入門書的性格をも合せ持つものと評したのは、かかる意味においてなのである。

とはいえ、内容に即して見た場合、本書に対して不満がない訳ではない。以下、著者がフィールドとされて来た畿内農村の幕末・維新史への位置付けを中心に、一・二疑問を記してみたい。

著者は、畿内農村の当該社会における位置について、次の様に述べられる。

もっともこの（社会変革の―評者）起爆剤は畿内農村という限られた先進地域を中心に検討されたが、それが大きな社会変革になるためには、変革対象の本体である後進地域での社会変化が注目されなければならないのである。ここで注目したいのは、本体としての後進地だけでは社会変革をひきおこすような社会変化は生まれがたいということである。また、起爆剤としての先進地域の社会変化だけでは、そのまま日本全体の変革をもたらすことにはならないという点である（三六頁）。

この指摘は、著者が本書に集録された諸論文を始めとして、自らの研究成果を幕末・維新史上に位置付ける為に示された、地域類型の骨組みであると思われるが、かかる捉え方については、幾つかの疑問を感じざるをえない。その一つは、「起爆剤」の意味が判らないことである。幕末期畿内農村において、幕藩制とは異質な社会関係が開港前より展開していたという主張は、通読して良く理解できるけれども、それが如何なる意味で「変革の起爆剤」たりえたのか、そもそも「起爆剤」とは何か、等については理解できなかった。これは、本書に社会変革自体についての論文が集録されていないことに関わるかも知れぬが、その後への展望が、「幕末において経済構造・社会構造と、政治形態は独自の原理にしたがって動く」（三六頁）とか、「幕末・維新期の農民闘争の成果から政権構想が生まれてこない」（一六五頁）といった抽象的表現で片付けられていることにも拠ると思われるのである。畿内農村の展開が、その後の社会変革・社会構造に如何に関わったのか、この地域のかかる展開を、思い入れを以って読み込む評者

などにとっては、物足りぬ所である。

次に、先の引用で納得できぬ点は、「先進」と「後進」との関係把握についてである。「先進」・「後進」という表現自体に、自国史にとって否定さるべき一国史的発想があることについては差し当たり措くとしても、何故「後進地」だけでは、社会変革を引起こす社会変化は生まれがたいのであろうか。この点は、先の「先進」地域＝畿内＝起爆剤把握と裏腹の関係にあり、著者の研究成果を位置付けるに際してのポイントとなる所であるが、右の如き把握は、自国史の提起を否定し、また著者自身のこれまでの成果をも無にしかねないものである、と評者には思われてならない。というのは、短絡的との叱責を恐れずに、これを先進資本主義国と後進資本主義国との関係に置き換えたらどうなるであろうか。「後進資本主義国とはいえ、日本が資本主義国として成立するには、（中略）単純に上からのコースの設定や外的な契機の提示で説明がすべてつくものであろうか」（八三頁）と問い、さにあらざることを力説される著者が、国内の後進地に対して右の如き断定を論証抜きで行なわれることは、自己矛盾ではないだろうか。そしてまたかかる把握は、後進国日本にはそれ独自では社会変革は起こらなかったという結論に、つまり著者自身の長年に亘る追究テーマの否定に繋がりはしないだろうか。この点、先の「起爆剤」と共に、お尋ねしたいと思う。

なお、右の「先進」・「後進」問題は、実は、批判対象の一人として挙げられている佐々木潤之介氏への、批判の仕方にも関わって来るように思われる。佐々木氏が如何に考えておられるかは別として、そして又氏の所論の当否は措くとして、著者の側から見れば佐々木説は、紛れもなく「後進」地域を素材に組立てた説と位置付けられようが、ここでの批判方法は自国史構築にとって生産的ではない。というのは、例えば、岡村の地主は佐々木氏の豪農範疇では律し切れぬとか、無高層には半プロとして捉えられぬものが存在する、といった様に、著者の方法は、豪農・半プロ論に含み込まれぬものの存在を指摘し、よって佐々木説を批判する形を取っているからである。研究史の上で、右の如き批判段階のあることは、評者も知っているつもりであるが、先の感想との関係で言えば、著者の側に、「後進」地域を中心に組立てられた佐々木説を包摂ないしは関連付ける枠組み（否定形においてではなく）が欲しい、という要求を持つのである。自国史の立場の提起に際して指摘された次の如き点、「国際的関連性のもとに把握された歴史的諸条件を、ふたたび日本史のなかにもち込み、日本国内での階級関係の変革の問題に再投入する」（二六頁）必要性は、「先進」地域と「後進」地域との関係把握においても、無縁な視角ではないと考えるのだが如何であろうか。畿内をフィールドに多くの成果をあげて来られた著者によって、この関連がつけられてこそ、初めてこの膨大な成果の真の位置が我々の眼前に現われ、かつ「民族的責任を負いうる自国史」（二九頁）執筆の第一歩が始まると思うのである。

以上、畿内農村の幕末・維新史への位置付けを中心に、一・二感想めいたものを記してみた。不十分にして的外れな紹介・批評に終始したことを恥じるが、最早紙数も尽きたようである。すでにこのシリーズの第二冊目『近世民衆教育運動の展開』は刊行され、また農民運動に関する著作の発刊も間近いと聞く。著者の更

なる御活躍と御健康を祈りつつ、拙い書評を終えることとしたい。

（A5判　三二一頁　一九七七年一二月　柏書房　三、八〇〇円）

（愛媛大学法文学部講師　　）